

主 題：神が人となられた

聖書箇所：ヨハネの福音書 1章14節

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」(ルカ2：11)、私たちは主の使いが告げたこの救い主の誕生のメッセージをたびたび耳にします。クリスマスのメッセージ、それは救い主がこの世に来てくださったというメッセージです。クリスマスのメッセージ、それは神が人となってくださったというメッセージです。今日、私たちが学ぼうとしているヨハネの福音書1章14節は実はその大切なメッセージを私たちに伝えてくれるのです。このみことばに私たちはすばらしいクリスマスのメッセージを見ます。ヨハネはこのように記しました。「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。**」、ヨハネはヨハネの福音書1章1-3節で、この「ことば」に関して大切なことを教えました。この「ことば」とは初めから存在したもので、また、神とともにおられたものであり、そして、神ご自身であると言いました。その上でヨハネはこの14節で、この神である「ことば」が罪人の救いのために肉体を取られたのだと、そのことをここで告げたのです。まさに、クリスマスのメッセージです。救い主が来てくださった、神が人となってこの世に来てくださったのです。

今日、私たちはこの1章14節のヨハネの語るクリスマスのメッセージから、すばらしい神の恵みを学んでいきます。ひと言で言うなら、それは「受肉」ということです。「肉を受ける」、「人となる」ということです。神が人となられたというそのメッセージを彼はここで語るのです。この「受肉」、神が人となったというこのすばらしい出来事を二つの面から見ます。

☆受肉の事実=神が人となられた=が教えること

### 1. 歴史的事実

神が人となった、人となられたのは神だったと言います。これは同じことを言っているのですが、この大切なメッセージを誤解することなくしっかり理解するように、ヨハネはこの14節でそのことを教えようとするのです。先ず、この最初のところ「**ことばは人となって、**」、神の「受肉」です。神が人となられたことです。そのことを話した後、ヨハネはその証拠を挙げています。受肉の事実、これを疑う人はいないでしょう。歴史上の事実です。ゆえに、世界中でこの出来事が祝われています。神が人となったというこの「受肉」という大切な出来事、この14節のみことばを、先ほドルカ2：11のみことばを「主の使いが告げた救い主の誕生のメッセージ」と私があえてそのように言って比較したのは、主の使いは「救い主が生まれた、イエスが生まれた、イエスがその救い主である」ということを言いましたが、14節では「イエス」ということばは出て来ないからです。ヨハネは「ことばが人となった」と言いました。なぜ、ヨハネは「イエス」、「救い主」と言わなかったのでしょうか？

◎ヨハネが「ことば」と言った理由

#### 1) この当時の人々がこのすばらしい救い、福音のメッセージを理解するために

私たちには「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。**」と聞いても、正直なところよく分かりません。主の使いが告げたように「**きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。**」と言われた方が分かり易いです。でも、皆さん、なぜヨハネが「救い主」、「イエス」と言わずに「ことば」と言ったのか？ここには非常に大切な意味があるのです。実は、ヨハネはその当時の人々がこの大切な救いのメッセージをより良く理解するために、あえて「**ことば**」ということばを使っているのです。というのは、1世紀において、ギリシャ語では「ロゴス」というこの「**ことば**」は人々の間でよく知られていたのです。

イエスの弟子であり使徒であったヨハネは、現在のトルコ、小アジアと言われるトルコのエペソという町でこの福音書を記したと言われていました。その当時の教会はどのような人々によって構成されていたのでしょうか？どちらかという、ユダヤ人たちより異邦人たちの方が多かったのです。教会を構成していたメンバーはヘレニズムの世界で育った人々でした。西洋文明の二つの源流はこのヘレニズムとヘブライズムです。ヘレニズムはギリシャ文化の影響を受けているもの、そして、ヘブライズムは旧約聖書などで見られる古代イスラエル民族の思想などが影響を与えたものです。ですから、ユダヤ人の影響を受けたものか、ギリシャ人の影響を受けたものか、簡単に言えばそういうことです。ですから、教会の中にはそのようにギリシャの文化や思想の影響を受けた人々がほとんどだったのです。ゆえに、ヨハネはユダヤ人が分かるような話をする、ギリシャ精神の影響を受けている人々には理解しがたいということを知っていたのです。そこで、そのギリシャのヘレニズムの影響を受けている人たちが理解できることを用いて、この大切な「神が人となった」という出来事を教えようとしたのです。

ギリシャ人たちはこのことば「ロゴス」についてどのように考えていたのでしょうか？それはこの自然や宇宙を見てそこに法則や秩序を見出し、それらを造り出したもの、それが「ことば」、「ロゴス」だと考えたのです。もちろん、私たちも真剣に考えるなら同じような発見をします。ギリシャ人はしかも、人間の物を考えたり、推測をしたり、認識する力、また善と悪とを区別することが出来ること、それらの力も、実は、ロゴスから人間に与えられたのだと考えていたのです。このような考え方が人々に受け入れられて、そして、広がっていたのです。ですから、ヨハネは彼らがそのような知識を持っていたので、「ロゴス」ということばを用いて、神が人となってこの世に来てくださったと、その真理を教えようとしたのです。また、当然、そこにはユダヤ人たちもいますが、彼らは「ことば」ということばを聞けばすぐに神のことを言っているのだと理解しました。この当時の多くのユダヤ人たちは旧約聖書のヘブル語を話しませんでした。彼らの日常語はアラム語でした。ですから、会堂で聖書の朗読がされる時、つまり、旧約聖書の朗読がなされる時、それはヘブライ語でしたから、そこに集まっている人々は理解できなかったのです。そのために、読まれている聖書を理解するためにタルグムというものが生まれました。それはヘブライ語の聖書のおおざっぱなアラム語訳です。そのようなものが配られたのです。人々はそれを見て読まれている内容を理解できたのです。英語で話されているとき、私たちにその翻訳の日本語が渡されるのと同じことです。そのようにして人々は理解したのです。

しかも、ユダヤ人たちは神の御名、主の御名をみだりに唱えてはならないという神の教えから、神に関して様々な言い方を用いるようになっていました。というのは、神の名を口にすることは神を汚してしまうという、そのような恐れから別のことばを用いたのです。それは「主、誉むべきお方」などで、その中の一つが「ことば」でした。ですから、タルグムを使っていた人々は「ことば」と聞くと、それは神ご自身のことを指していると理解したのです。アレキサンドリアにフィロンというユダヤ人がいましたが、彼はこの両方の世界に通じた人物でした。そして、W・ハワードという神学者によると、このフィロンはロゴスを1300回もいろいろな意味で使っており、その中で彼はロゴスを「啓示された神ご自身」として使っていると言っています。ですから、このような時代背景があったのです。

ヨハネはこのような人々にこのすばらしい救いのメッセージを語ろうとしたのです。これらの人たちが「神が人となった」というこの事実を理解するためには、「ことば」、「ロゴス」を用いるのが最適であると考えたのです。それゆえに、ヨハネは14節でこのように記したのです。

## 2) イエス・キリストご自身が神のことばであるから

もう一つ、なぜ、ヨハネは「ことば」と言ったのか、イエスを「ことば」と呼んだのでしょうか？それはイエスは神の代弁者であったからです。だから、「神のことば」と言ったのです。イエスはこの地上に来られてから何をなさったのでしょうか？二つのことを見ます。a) 神を明らかにしました。 b) 神のメッセージを人々に明らかにしました。ヨハネの福音書1：18を見てください。**「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。」**とあります。だれも神のことを知ることはできません。神は霊ですから、その神のことを私たちは知ることはできないのです。しかし、イエス・キリストが来てくださったことにより、イエスは私たちに聖書の教える神、このすべてのものをお造りになった神、そして、私たちが造られた創造主なる真の神がどのようなお方であるかを明らかにしたのです。私たちがこの目で見ることができない神をイエスは明らかにしたのです。神の力がどれ程偉大なものであるか、神の知恵がどれ程偉大であるか、神の聖さがどれ程のものなのか、神の恵みの深さがどれ程のものなのか、神の愛がどれ程深淵であるか、神の正しさとはどのようなものか、それらを私たちに明らかにされたのです。イエス・キリストのその生きざまは、私たちにこの聖書の教える真の神がどのような存在であるかを明らかにしたのです。

同時に、イエスは神のメッセージを明らかにされました。ヘブル1：1-2に**「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。」**と記されています。かつては、預言者たちが神からのメッセージを語ったが、世の終わりにはイエス・キリストによって、つまり御子によって、私たちに神からのメッセージが与えられると言うのです。ですから、イエス・キリストは神のメッセージを明らかにしたのです。

なぜ、ヨハネが14節でイエスのこと、救い主のこと、神のことを「ことば」と言ったのか、実は、このような背景があったのです。

## 2. ヨハネはそのこと目の目撃者

### 1) ことばが「人」となって

ヨハネは「ことば」、神が「人となられた」と言いました。そして、その方は**「私たちの間に住まわれた。」**、神が人となって私たちの間に来て住んでくださった、これは事実であると言います。そして、彼はその証拠をここに挙げています。この「人」ということばは簡単に言えば「肉体、からだ」のことです。新約聖

書の中に147回も出て来ることばです。例えば、皆さんよくご存じのように、パウロが自分のからだに一つのとげが与えられたと言いましたが、そのからだと同じことです。Ⅱコリント12：7「…そのために私は、高ぶることのないようにと、**肉体**に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。」、Ⅰコリント15：50にも「兄弟たちよ。私はこのことを言うておきます。**血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。**」とあります。また、ヘブル人への手紙2：14には「そこで、**子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、**」とあります。ですから、「**人となって**」ということは「**肉体**」をもつということです。そして、「**人となって**」というこの動詞の時制はもうすでに起こった出来事であることを表わしています。もうすでに、歴史上の出来事として、神が人となって肉体をもってこの世に来てくださったということです。「**私たちの間に住まわれた**」、この「**住まわれた**」ということば、これは「**テントを張ってテント生活をする、天幕生活をする**」という意味です。その当時の人々はテントを張ってそこに居住し、また移動しました。つまり、一時的で永久的ではないのです。ですから、ここでヨハネが言いたかったことは、神が肉体をもって人間としてこの世に一時的に、ある短い期間来てくださったということです。

どうしてそのように断言できるのでしょうか？ヨハネが言わんとしているのは、この事実を伝えた上で「私はこれが事実であると断言できる。それは私自身がその出来事を目撃者だから。」ということです。同じヨハネが書いたヨハネの手紙、Ⅰヨハネ1：1には「**初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて、**」とあります。彼が言っていることは「私はこのいのちのことば、すなわち、人としてこの世に来てくださったその神に、直接接触し、その方を実際に自分の目で見、この方の言われていることを実際にこの耳で聞いた。だから、私は確信をもって言うことができる。確かに、神は人となって来てくださった。私はその方と話し、その方に触れたのだから。」ということです。このヨハネという人物を考えると、このヨハネの福音者は私たちに彼について知るヒントを与えてくれています。彼は他の福音書に見ない細かい説明をしています。特に、数に関して詳細な説明をしていることが分かります。たとえば、ヨハネ2章にはイエスの最初の奇蹟、カナの婚礼の出来事が記されています。2：6「**さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。**」、その水をイエスはぶどう酒に変えるのですが、「**八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ**」と、おもしろい表現です。なぜ、彼はこのようなことを言っているのでしょうか？自分が見たからです。その水がめの大きさがどれ程で、そこにいくつ並んでいたのか、しっかり知っているのです。実際にそれを見ているからです。また、6章では五千人の給食の話が出て来ます。大麦のパン五つと小さい魚二匹でもって、男だけで五千人が満たされたというその奇蹟です。6：13を見ると「**彼らは集めてみた。すると、大麦のパン五つから出て来たパン切れを、人々が食べたうえ、なお余ったもので十二のかごがいっぱいになった。**」と、非常に細かくその情景を記しています。また、21章の最後のところ、弟子たちは漁に出ますが、そこで復活の主イエス・キリストが彼らの前に現われました。その時のことがこのように記されています。21：8「**しかし、ほかの弟子たちは、魚の満ちたその網を引いて、小舟でやって来た。陸地から遠くなく、百メートル足らずの距離だったからである。**」と、その距離をこのように具体的に記しています。また、その次の11節を見ると、「**シモン・ペテロは舟に上がって、網を陸地に引き上げた。それは百五十三匹の大きな魚でいっぱいであった。それほど多かったけれども、網は破れなかった。**」とあります。

つまり、これらは何を意味しているか、ヨハネはその出来事をすべて見ていたということです。だから、彼はこのように具体的に細かく記すことができたのです。もちろん、このような数字だけではありません。人に関してもその通りです。たとえば、ニコデモに関しても、ラザロの姉妹に対しても、また、ゲッセマネの園でペテロが大祭司のしもべの耳を切り落としましたが、ヨハネはそのしもべの名前をきちんと記しています。マルコスと。「**シモン・ペテロは、剣を持っていたが、それを抜き、大祭司のしもべを撃ち、右の耳を切り落とした。そのしもべの名はマルコスであった。**」（ヨハネ18：10）。ですから、このヨハネの福音書を見ると、ヨハネは実際に自分の目で見たと、それをこのように記していることを知ります。だから、彼は言うのです。「私は実際にこの主イエス・キリストの話がこの耳で聞いた。実際に、私はこの目で彼を見た。そして、私のこの手で触れた。確かに、神は人としてこの世に来てくれた」と。このことを私たちは先ずこの14節の初めに見ることができます。

## 2) 受肉の神

ヨハネの福音書1章の初めから「神の受肉」ということを私たちは見て来ました。神が人となられたことです。次に、私は「受肉の神」としました。つまり、人となられたのは確かに神であったということです。そして、ヨハネはこの後、その方が神であったことの証拠を挙げて行きます。「神が人となられた。そして、この人となられたお方は神なのだ」と。14節には弟子たちがそのことを証言していると

あります。弟子たちが「この人となられたお方、このイエスは神である」と、そのことを弟子たちが証明すると言います。14節の後半に「**私たちはこの方の栄光を見た。**」とあります。これは「驚きをもって見る、しっかりと眺める」ということです。新約聖書に22回出て来ることばです。実際に、自分の目でしっかりと見たのです。そして、その上で彼らは証言するのです。私たちは三つの証言を見ます。

#### ◎イエスに関する弟子たちの証言

- 1) この方は栄光の神であった
- 2) この方は神のひとり子であった
- 3) この方は救い主であった

#### 1) この方は栄光の神であった

「**私たちはこの方の栄光を見た。**」とこのようにヨハネは言いました。イエスの生涯、イエスのその生きざまは、まさに、神の栄光を現わすものであったと言っているのです。イエスの生きざまを見た時に、人々はそこに神の栄光を見たのです。なぜなら、イエスが言われたように、イエス・キリストは父なる神のみこころに忠実に従って行かれたからです。ですから、ヨハネ17:4で「**あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。**」とヨハネは言っています。イエスは完璧に父なる神の栄光を現わしたのです。どのように現わされたのでしょうか？彼は父なる神のみこころに従って生きました。だから、私たちも神の栄光を現わそうとするなら、同じことです。神のみこころに忠実に従い続けて行くことです。その時に、神の栄光は感謝なことに私たちのような者を通して明らかにされて行くのです。イエスの生涯を振り返ってみる時に、まさに、それは神の栄光を現わしたものでした。イエス・キリストの奇蹟的な誕生を思い出してください。処女マリヤを通してイエス・キリストは誕生しました。奇蹟です。あり得ないことです。でも、イエスの誕生を見る時に私たちは神のすばらしさを誉め称えます。イエス・キリストの卓越性を考えてください。だれをも彼と比較することは出来ません。彼はすべての点において優れていました。だれも彼を非難することは出来なかったのです。また、彼の比類なき教えに皆は驚きました。律法の専門家も驚いたのです。いったい彼はどこからこのような学びをしたのだろうか。そして、イエス・キリストの驚くべき奇蹟、先ほど私たちはヨハネ2章で見ましたが、水をぶどう酒に変えるという最初の奇蹟を行われた時に、イエスはご自分の栄光を現わされたのです。2:11には「**イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行ない、ご自分の栄光を現わされた。それで、弟子たちはイエスを信じた。**」と記されています。

ですから、イエスの様々な驚くべき奇蹟を通して神の栄光が現わされたのです。そして、その最たるものは、イエスの十字架であり復活でした。このヨハネの福音書12章に出て来ますが、イエス・キリストがその十字架に近いことを知って「**人の子が栄光を受けるその時が来ました。**」(12:23)と言われました。なぜなら、私たちがイエス・キリストの十字架を見る時に、神がどれ程私たちを愛しているのかを見るからです。イエス・キリストの十字架はむごたらしく、私たちは目を覆いたくなります。しかし、私たちがイエスの十字架を見たとき、神の明確なメッセージを聞くのです。見るのです。「わたしはあなたの罪を赦す。あなたのすべての罪を赦す。あの苦しみはあなたの罪のためだったからだ。」と。ですから、私たちはイエスの十字架を見た時に、私たちの神はすばらしいお方であることを見るのです。ですから、イエス・キリストの生涯は確かに神の栄光を現わすものでした。

もう一度、今日のテキストに戻って、先ほども少し説明しましたが、「**私たちの間に住まわれた。**」ということば、これはテント生活をするとか天幕生活をするという意味でした。このことばは旧約聖書を知っている者たちにとって、あることを思い起こさせました。これは「幕屋」を彷彿させたのです。旧約の時代にあって、主はモーセに幕屋を造るようにと命じました。そして、その幕屋が完成したときに何が起こったのでしょうか？出エジプト40:34に「**そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。**」と記されています。幕屋を神の栄光が覆ったのです。人々はそこに神の栄光を見、そこに神が臨在されていることを知ったのです。同時に、ソロモンが神殿を造りましたが、その神殿が出来たときも同じことが起こっています。I列王記8:10-12にその神殿の完成後のことが記されています。「**祭司たちが聖所から出て来たとき、雲が主の宮に満ちた。:11 祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかつた。主の栄光が主の宮に満ちたからである。:12 そのとき、ソロモンは言った。「主は、暗やみの中に住む、と仰せられました。」**、つまり、幕屋を造って、そして、彼らは旅をしました。そして、約束の地に入った彼らは神殿を造ったのです。神はそのどちらも用いてご自身の栄光を現わされたのです。

ヨハネは14節で「**私たちはこの方の栄光を見た。**」と言いました。ちょうど、あの幕屋が神の栄光に満たされたとき、人々はそこに神がおられることが分った、そのことを言っているのです。イエスの歩みを見た時に、彼は神の栄光を現わしていました。そこに神がおられると、同じように、人々はそのことを知ったのです。だから、イエスは確かに人となられた、けれども、イエスは神だったのです。ある人たちは、確かにイエスは神だったかもしれないけれど、人間になった時に彼は神でなくなったのではな

いかと言います。聖書はそのようなことは教えていません。たとえば、エジプトの王宮で育ったモーセ、彼はその後、イスラエルの民を率いて約束の地へと向かいました。実際に彼はそこに入れませんでした。王宮に住んでいたモーセと、後にイスラエルの民を率いたモーセは別の人でしょうか？同じです。同じモーセです。確かに、着ていたものは違うかもしれない、食べていたものは違うかもしれない、住んでいた住居も環境も変わったかもしれませんが、でも、周りが変わっても本質的に同じモーセです。たとえ、神が人となったとしてもそれで彼が神でなくなったということではありません。神であり続けるのです。彼は永遠に神です。ですから、ヨハネはこの人となられたお方、このお方は神であり続けると、そのことをここで言っているのです。もちろん、このことはみことばの中で繰り返されていることです。

たとえば、ヘブル人への手紙 1 : 3 で著者はその真理を非常に分かり易く私たちに教えています。「**御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。**」と、詳しい説明はしませんが、もう私たちはすでにヘブル人への手紙を学びました。でも、この 3 節に記されている二つのことばを見ましょう。「**御子は神の栄光の輝き**」、この「**輝き**」というのは、私たちイエスを信じて救われた者たちが神の栄光を反射させながら生きる、そのことを言っているのではないのです。「**栄光の輝き**」、確かに、反射するとか反映するとか、放射するという意味があります。しかし、ここで言われていることは、この御子、つまり、イエス・キリストは栄光の光をご自身が放つと言っているのです。反射ではないのです。ご自身がその光の源なのです。栄光の源なのです。そのことをこの著者はこのように言ったのです。ですから、著者が教えたかったことは、まさに、この御子、イエス・キリストは栄光の神であるということです。次に「**神の本質の完全な現われ**」と言いました。これは「しるし、刻印を押されている」ということです。全く同じだと言うのです。ですから、確かに、霊の神と肉体を持った神、外側が異なっているけれども本質はまったく同じである、本質の完全な現われだということです。

ですから、確かに、人となられたこのイエスは「神のことば」であり、この方は「神」であると、先ず、そのことを弟子たちは証言したのです。「この方は神だ、栄光にあふれた神だ。」と。

## 2) この方は神のひとり子であった

二つ目に、もう一度ヨハネの福音書に戻って「この方は神のひとり子である」と言います。「**父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。**」と。ここでは、受肉のことよりも父なる神と子なる神イエス・キリストの特別な、しかも、永遠の関係を現わしています。「**ひとり子**」、ユニークな存在、他に類を見ない存在だと言うのです。そのような関係にあるということを弟子たちは告げたのです。ペテロがⅡペテロ 1 : 16 で、山上の変貌のことと思えるその出来事を引用して、このように告げているところがあります。「**私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。**」、私たちはキリストの偉大さ、キリストの尊厳の目撃者ですと言うのです。そして、その後 17 節からそれが山上の変貌の話であると見ることができる説明を加えています。何が起こったのでしょうか？天から声がしたのです。17 節「**キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」**」、ペテロは分かったことでしょうか。このイエス・キリストが父なる神と特別な関係にあることが、ヨハネはそのことを知っていました。父のみもとから来られた、非常にユニークな、他に類を見ない関係にある神のひとり子であるイエスだということ。

## 3) この方は救い主であった

三つ目に弟子たちが証言したことは「この方は救い主である」ということでした。最後に、「**この方は恵みとまことに満ちておられた。**」とあります。

(a)「**恵み**」＝時間を取って皆さんにその意味を説明する必要はないでしょう。皆さんはよくご存じだと思います。受けるに相応しくないものを、受けるに相応しくない者に与えてくださったものと言えるし、受けるに相応しくない者に好意を示すということ、いずれにしても、神が私たち罪人のために為してくださったのはこの「**恵み**」以外の何ものでもありません。たとえば、私たちが神に逆らい罪を犯しているゆえに、悩み続けていることは当然ですが、そのような私たちに神は喜びを与えてくださいます。これは恵みです！そのような喜びを受ける資格は私たちにはありません。私たちは神に逆らっている、でも、神はそのような祝福を与えてくださったのです。絶望の中を歩み続けて当然の私たちに神は希望を与えてくださったのです。ヘブル 4 : 15 のみことばは私たちへの励ましではありませんか？「**私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした、すべての点で、私たちが同じように、試みに会われたのです。**」、私たちは神の前に私たちが経験する様々な問題や苦しみ、困難を説明する必要はありません。神は確かに分かっておられる、私たちに同情できない方ではない、つまり、同情できる方、あなたの苦しみを分かっている、あなたの痛みを分かっている、あなたの抱えてい

るその悩みを知っている、このような神です。私たち人間の世界では一生懸命説明しても全然分かってくれない人がいます。もし、神がそのようであったらどうしますか？「いくら言ってもダメ、分かってくださらない」と言わなければなりません。しかし、感謝なことに、私たちが言う前から分かってくださっているのです。罪ゆえに絶望の中を歩み続けて当然の私たち罪人に、神は希望を与え、罪ゆえに不満足の中を歩み続けている私たち罪人に、神は本当の満足を与えてくださる。罪ゆえに永遠の地獄に行くことが当然の私たち罪人に、神は天国を与えてくださり、罪ゆえに神の呪いを受けて当然の私たちに、神は永遠の祝福を与えてくださった。罪ゆえに神の怒りを受けて当然の私たち罪人に、神はその罪の赦しを与えてくださったのです。何という神でしょう！何と恵みに満ちあふれた神でしょう！私たちの罪に応じて報いを与えるのではなく、その罪を知った上で、その醜さを知った上で、私たちにこのような祝福を与えようとしてくださっているのです。

しかし、それに反して、人間がしていることは何でしょう？ヨハネの福音書1：10-11にはこのようにあります。「**この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。：11 この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。**」、結局、人間がしたことは、私たちが造られたこの創造主なる真の神を拒み続けるということです。この方を信じようとしめない、この方に従って行こうとしめない、この方に逆らい続けている、これが私たち人間の姿だと言うのです。そのような私たちに神は祝福を与えると言うのです。もし、私たちが罪を悔い改めてこの救いを受け入れるなら…。神は何と恵みに満ちあふれた方でしょう！

(b)「まこと」＝ もう一つ、「**まことに満ちている**」と言います。「まこと」、このギリシャ語のもとになっているヘブライ語の意味は「誠実、真実、真理」という意味をもったことばです。ですから、「確実さ」「信頼性」という意味があります。神は信頼に価するお方です。何という喜ばしい真理でしょう。この方を信頼していて間違いはないのです。信仰の勇者たちが誉められたのはこの点でした。彼らはこの神に信頼を置いたのです。なぜなら、この神は確かに信頼に価するお方だからです。この方の言われたことはすべて真実で、神は言われたことを必ず成し遂げられるからです。この方に無理なことはない、出来ないことはないのです。この方は「まこと」であるがゆえに、言われたことを必ず実現されるのです。ヨハネは「**この方は恵みとまことに満ちておられた。**」と言いました。旧約聖書の出エジプト記34章にはシナイ山に上ったモーセのことが記されています。5節には「**主は雲の中にあつて降りて來られ、彼とともにそこに立つて、主の名によって宣言された。**」とあり、続いて、6-7節には「**主は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、：7 恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」**」と記されています。これが神です、「これがわたしだ」と言われたのです。神がそのように言われたのです。そして、私たちはヨハネの福音書1：14でヨハネが言っていること「**この方は恵みとまことに満ちておられた。**」というみことばを見るのです。

弟子たちが、そして、このヨハネが伝えたかったこと、それは「この方は神だ！」ということです。このヨハネ1：14を私たちはざっと見て來ました。ヨハネは「**ことば**」、つまり、イエスは神が人となられたお方である、神である方が人となられた、そして、人となられたイエスはまことに神だったと言うのです。この14節で、ヨハネは「受肉」、神が人となったというこの受肉を強調しています。なぜでしょう？なぜ、神が人となったということを強調したのでしょうか？実は、この当時、その教えを否定する異端が存在していたからです。一つは、「キリスト仮現説」と言われるものです。どういうことでしょうか？彼らは現実にはイエスは肉体をもったのではなく、人のように見えただけ、仮に現われるという説、「仮現説」です。もう一つの異端は「アリウス主義」と言います。イエスは無から創造されたただの人間であると言います。しかし、彼が宇宙を創造した、だから、崇拜を受けるに価すると、このような考えです。ですから、「キリスト仮現説」は神が人となったという「受肉」を否定しました。そして、アリウス主義はイエスの神性、イエスが神であるということを否定するのです。

だから、ヨハネはこうしてイエスは人となられた神であり、この人となられたイエスは間違いなく神である、イエスの人間性と、そして、イエスの神性を強調したのです。お分かりになりますか？ヨハネは一生懸命、その当時の人々にこのすばらしい救い主の誕生を伝えようとしてきました。「救い主が生まれてくれた。救い主が来てくれた。神が人となってこの世にお見えになった。このイエスは神だ！」と。このヨハネはヨハネの手紙第4章でこのようなことを言っています。4：14「**私たちは、御父が御子を世の救い主として遣わされたのを見て、今そのあかしをしています。**」と。確かに、お生まれになったお方、人となってこの世に來てくださったこのことば、イエス・キリストは私たちに罪から救うために來てくださった救い主であると、そのようにこの弟子たち、そして、ヨハネは証言するのです。

ヨハネのメッセージ、「**ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。**」、神が人となってこの世に來てくださった、すばらしいクリスマスのメッセージです。救い主が確かに來てくれたのです。ですから、

このヨハネの福音書を書いたヨハネは最後にこのように言います。これがこの福音書の目的であると言います。ヨハネ 20：31「**しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。**」、何のためにヨハネがこの本を記したのか？イエスが神の子キリストであること、イエスが救い主であることをあなたがたが信じて、そして、永遠のいのちを得るためであると言います。ヨハネが言いたかったこと、それは「救い主が来た、あなたを救うために来た、あなたはその救い主を信じて、このすばらしい救いをいただいていますか？」です。クリスマス、それは「救い主が来てくださった」というメッセージです。でも、このメッセージを聞いたあなたには責任が生じました。救い主を受け入れるのか、それとも、先ほどヨハネの福音書 1：11 で見たように「**この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。**」とこのようになるのかです。そのような罪を止めることです。神に逆らい続けることを止めることです。そして、今このように「**恵みとまことに満ちておられた**」神が救してくださると言われている間に救いを求めて出て来ることです。どうぞ、この救い主を、あなたを救うために来てくださった救い主を、あなたの救い主として信じてください！そのことを心からお勧めします。